

農業技術 プリズム

長崎県では、ジャガイモシストセンチュウの発生面積が拡大しており、発生密度の高い圃場（ほじょう）ではジャガイモの収量が著しく減少します。また、発生圃場では種芋の生産ができないことから、大きな問題となっています。

ジャガイモシストセンチュウの卵は、温度や湿度等の環境の変化や薬剤に対する耐性が高いシストの内部で保護されていることから、土壌中では10年以上生存することも可能です。一方、同センチュウの抵抗性品種は、根に侵入したジャガイモシストセンチュウを全て死亡させるため、高い密度低減効果が期待できます。そこで、同センチュウが発生する圃場でジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種

「アイユタカ」と感受性品種「ニシユタカ」を作付けし、土壌中の線虫密度の推移を調査しました。

ジャガイモシストセンチュウ対策 抵抗性品種の活用を 連続作付けで効果大

その結果、「アイユタカ」を春作と秋作に連続して作付けすると、土壌中の卵数が低減し、

4作連続して作付けした後の土壌では、生存した卵は認められませんでした。

このことから、抵抗性品種を作付けすると、ジャガイモシストセンチュウを極めて低い密度まで減少させることができます。

す。ジャガイモシストセンチュウが既に発生した圃場では、積極的に抵抗性品種を導入しましょう。

（県農林技術開発センター
馬鈴薯研究室 福吉賢三）

